

# 秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成25年6月1日(第1229号)



発行／(社)秋田県建設業協会  
秋田市山王四丁目3番10号  
TEL 018(823)5495  
FAX 018(865)2306

協会

## 表彰式・第81回定時総会

秋田県建設業協会は5月28日、表彰式並びに第81回定時総会を秋田キャッスルホテルで開催した。

### 表 彰 式

定時総会に先立ち、表彰式が執り行われ、(一社)秋田県建設業協会、(一社)全国建設業協会、(公財)建設業福祉共済団、(一社)全国土木施工管理技士会連合会における

表彰者75名の受賞が披露され、各賞の代表に対し、表彰状並びに記念品が授与・伝達された。

各団体・各条項における受賞者数は次の通り。

#### (一社)秋田県建設業協会

表彰規程第4条 (会員企業)	15社
表彰規程第5条 (会員企業の従業員)	27名
表彰規程第6条 (正会員の職員)	1名

#### (一社)全国建設業協会

表彰規程第2条4号 (特別功労:会員企業の役員)	5名
表彰規程第2条7号 (特別功労:建設業団体の職員)	2名
表彰規程第4条1号 (会員企業)	6社
表彰規程第5条 (会員企業の従業員)	8名

#### (公財)建設業福祉共済団

個人の部	5名
------	----

#### (一社)全国土木施工管理技士会連合会

表彰規程第3条(2)口 (役員)	2名
表彰規程第3条(2)ハ (職員)	2名
表彰規程第4条第2項 (優良工事従事技術者)	2名

### 第81回定時総会

表彰式終了後、第81回定時総会が開会され、会員及び関係者約180名が出席した。

冒頭の挨拶に立った村岡淑郎会長は、昨今の経済状況に触れ、「政権交代以降の経済情勢は、経済政策である“アベノミクス”に大きな期待感が先行し、景気好転を実感するところまでは至っておらず、楽観は許されない状況にあります」と述べ、平成10年度以降続いてきた建設投資額の減少により建設産業の存続が危惧



される中、県内建設産業が将来にわたって社会的責任を果たしていくために、会員企業に平成28年までの中・長期的な目標と活動方針を示し、足腰の強い地域の建設産業として存続し、さらには発展していくことを目的とした「秋田県建設業協会ビジョン」を策定を紹介した。同ビジョンでは、「県民、地域社会に対しては、安全・安心の確保を優先し、地域社会の維持に努めるとともに、地域経済・雇用にも責任を果たしていく」ことが示されており、ビジョンを実現するため、事業年度ごとに検証し、修正を加えながら目標を達成していくことを述べた。そして、最後、「昨年度末から現在までの県内建設産業を取り巻く環境は、事業量に明るい兆しが見え、設計労務単価の大幅アップ、低入札価格調査基準の見直しなど山積していた課題の解決への道筋ができてきたものと歓迎する」とした上で、「非常に厳しい環境の中を耐え忍んで生き延びてきたことを今一度思い起こし、会員一同が一致団結し、肅々と基幹産業としての社会的責任を果たして

いくことが肝要と考えるところであります」と述べた。議事では、特例民間法人の移行等に関連した任期の満了による役員改選が諮られたほか、24年度における財産の状況、事業報告、また、25年度事業計画・予算が審議され、全ての議案が承認・可決された。

## 議案

- 第1号議案 理事及び監事の選任の件
- 第2号議案 平成24年度貸借対照表及び正味財産増減計算書及びこれら付属明細書承認の件
- 第3号議案 平成24年度事業報告及び事業報告の付属明細書報告の件
- 第4号議案 平成24年度公益目的支出計画実施報告書報告の件
- 第5号議案 平成25年度事業計画及び収支予算報告の件

## 県協会

# 雇用改善推進委員会を開催

## 推進方針、実施計画など報告



県協会では、5月15日(水)に秋田ビューホテルにおいて、秋田労働局、秋田県及び関係団体による雇用改善推進委員会を開催し、業界、行政機関の代表など10名が出席した。

協議事項では、事務局から平成24年度雇用改善推進事業実施状況報告、平成25年度雇用改善推進方針、平成25年度雇用改善推進事業実施計画について説明があった。

その中で、25年度事業として、本年度も引き続き労働福祉の充実のため事業主、雇用管理責任者等を対象にメンタルヘルスセミナーの開催を予定しており、今年度も秋田労働局と秋田県との共催で行うことであれば、当会も昨年同様参画させていただくとした。また、高校生向けのインターンシップや現場見学会、小型車両系建設機

械等の特別教育、在学中の建設関連施工管理技術者の資格取得の支援を実施することを報告し、推進方針、実施計画が了承された。

意見交換では、委員から業界のイメージアップについて「作業服やヘルメットのデザイン、ロゴマークの工夫など魅力的な宣伝効果で若者に対する建設業のアピールの仕方に工夫が必要ではないか」「イメージアップに加えて他産業より建設業の初

任給の低さが問題なのではないか」「建設業に対しての認識が若者も親も低い。業界の社会的地位・意義をアピールしていくことが必要ではないか」との指摘があったことを受けて、協会側からは「東北地方整備局と共同で、青年会の会長を経験した方などを講師にむかえ、高校2年生、3年生を対象に『就活ゼミ』を開催し建設業のPRすることを計画している」と報告した。

また、行政側からは「助成金申請手続きも従来より簡略された。是非活用していただきたい。」「建設業の労働災害件数は他産業に比べて大きく減少している。建設業界の皆さんの大変な努力あつての成果である。安全に対する努力も大きなPRポイントになる。引き続きご協力をお願いする」と述べるなど積極的な意見交換がなされた。

# 秋田・鉄路の情景

Vol.  
8

## 「スーパーこまち、羽越線を走る?!」

E6系秋田新幹線



文と写真／加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター  
取材・執筆歴／旅の手帖、WoodyLife、  
ベンチャー・リンク、郷、ある他  
海外取材歴／ドイツ、アメリカ、ブラジル  
写真塾・写楽 主宰／写真教室、撮影ツアー  
企画等

この原稿を書いているのは5月下旬だが、6月2日のJR羽越線沿線はちょっとしたお祭り騒ぎになるのではないかと、筆者は予想している。

それはこの日、スーパーこまちが新津駅から秋田駅までの羽越線を走るからだ。「そんなバカな!」と思われる方もおられるだろうが、これは事実。

ただし、もちろんカラクリはある。兵庫県の鉄道車両製造会社で製造されたE6系スーパーこまちの新車が、東海道線・上越線・羽越線を経由して秋田の新幹線基地である秋田車両センターに“納車”されるのだ。

一般に、東北新幹線や秋田新幹線の落成車両は、台船に積まれて海路で仙台港まで運ばれ、トレーラーで道路を通過して利府町の新幹線車両センターに納められるパターンが多いのだが、手間や輸送コストを考えてみても、線路の上を走らせて納車できるのならそのほうが都合がよさそうなのは素人にも理解できる。

E6系や現行のE3系は、新幹線車両と言っても在来線の特急車両並みにコンパクトなサイズなので、在来線を走らせて(機関車に牽かれてだが)車両基地に届けることはさほど難しくない。新幹線と在来線ではレール幅が違うので輸送中は在来線用の仮台車を履かせる。

この輸送スケジュールは鉄道趣味誌などに掲載されるから、熱心な鉄道ファンは既に承知していて、当日は全国から“撮り鉄”が羽越線沿線に繰り出すことになるのだ。もしかしたらこの日は、並行する国道7号も少し混み合うかもしれない。路肩に車を停めて通過する列車を撮り終えたら、すぐにまた車を走らせて先回りしてもう一度シャッターチャンスを狙うという鉄道ファンも少なくないから。

筆者は残念ながらこの日は仕事があって撮影には出向けないが、6月23日にも同じE6系の新車回送輸送(甲種鉄道車両輸送と言う)があるようなので、その時はぜひ狙ってみたいと思っている。在来線を走った新幹線車両として、将来、“お宝写真”になるのではないかと思うから。

(掲載写真は羽越線吹浦～女鹿間を走る特急いなほ)

## 潮瀬崎の津波石

永井登志樹

前回のこの随想欄で、別の場所から竜巻や嵐などで運ばれてきたと伝承されている不思議な岩石を紹介したのだが、今回はその続編として「津波石」の話をしてみたい。

津波石とは、津波によって陸上に打ち上げられた巨石のこと。大きなエネルギーを有した津波の押し波は、水圧で海中の巨石などを巻き上げ、陸地の内部まで運ぶことがある。よく知られているのは石垣島や宮古島など沖縄の先島諸島の津波石で、海岸や台地に多数の大岩が点在している独特の景観は、サンゴ礁が石化したサンゴ石灰岩が大津波により運ばれたものといわれている。サンゴの岩塊は比較的もろく比重が小さいので、波に運ばれやすいのだという。

だが、津波石が打ち上げられるのは、サンゴ礁に囲まれた先島諸島のような亜熱帯の島々ばかりではない。岩手県三陸地方の田野畑村羅賀地区には、1896年(明治29年)の明治三陸大津波で運ばれてきた津波石がある。私は昨年7月に現地でこの石を実際に見たのだが、推定20トンもの大岩が海岸から300メートル以上離れた標高約25メートルの場所にあったのには、驚いた。一昨年3月の東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)では、羅賀地区の住宅150軒のほぼ半数が全壊し、9名の死者が出た。この時の津波は再びこの津波石まで到達したというから、波高が25メートル以上あったことになる。

そしてもっと驚いたのは、ハイベ海岸という小さな入り江で見た東日本大震災による新たな津波石。写真で見ればわかるように、大人の背丈の倍以上はある巨石だ。案内してくれた田野畑村役場の方によれば、羅賀地区の津波石とは違って海中にあったものではなく、波打ち際から15メートルほど移動したのだというが、それでもあらためてこのたびの津波の強大な力を知る思いがした。

ところで、東北地方では三陸海岸だけでなく、最近になって秋田県沿岸でも津波石の存在が注目されているのをご存じだろうか。場所は男鹿半島南岸の潮瀬崎。この岩場に点在する岩塊を津波石だとしたのは秋田大学名誉教授(地質学)の白石建雄先生で、一昨年12月に福島市で行われた日本地質学会東北支部会で初めて公に発表した。

潮瀬崎はいつ行っても大勢の釣り人が糸をたれている磯釣りのメッカだが、怪獣のゴジラにそっくりだと話題になったゴジラ岩があることでも知られ、2年前に日本ジオパークに認定された男鹿半島・大潟ジオパークのジオサイト(地質や地形を観察できる場所)のひとつでもある。

ここに立ち並んでいるゴジラ岩などの岩石は、火山灰や礫(岩石のかげら)などの火山噴出物が固まったもので、表面がごつごつざらざらして黒っぽい火山礫凝灰岩で主に構成されている。ところが、波で削られて平らになった岩場をよく見ると、明らかに周囲の岩石と種類が異なる赤みを帯びた岩塊が十数個転がっているのがわかる。写真は中でも最も大きいもので、高さ約3メートル、幅5メートルにもなる。これらの巨石は火山礫凝灰岩の地表とはつながっておらず不安定に載っているだけなのだが、昨年4月に襲来して大きな被害をもたらした爆弾低気圧(猛烈低気圧)の暴風波浪でも全く動かなかった。そこで白石先生は「暴風波浪よりもエネルギーの大きい津波によって、別の場所から運ばれたと考えるのが自然」、つまり潮瀬崎の巨大岩塊は津波由来の可能性が高いと指摘したわけである。

では、いつごろの津波で運ばれたのだろうか。現時点でははっきりわかっていないが、白石先生は少なくとも2000年以上前であろうとし、対岸の鳥海山の噴火で山なだれが起き、それが津波を引き起こしたということも考えられるとしている。

津波は東日本大震災のような巨大地震だけでなく、海底火山や海底地すべり、火山噴火による山体崩壊によっても引き起こされることがわかっている。山体崩壊による津波で最も有名なのは、1792年(寛政4年)に起こったいわゆる「島原大変肥後迷惑」だ。肥前島原(今の長崎県)雲仙岳の火山性地震と、その後の眉山の山体崩壊(島原大変)により、島原半島や対岸の肥後(今の熊本県)を襲った津波(肥後迷惑)による災害で、津波による死者は島原で約1万人、肥後で5000人に上るといわれている。

1741年(寛保元年)に起こった北海道の渡島大島の噴火による山体崩壊でも、津波で1500人以上の犠牲者が出た。江戸時代中期の文人・菅江真澄は、津波で亡くなった父親の供養をする老女が語る50年前の惨状を、北海道を旅していた1789年(寛政元年)の日記に書き留めている。

秋田県で発生した地震が記録に残っているのは830年(天長7年)の天長地震以降のことで、歴史時代以前の地震・津波については、ほとんど何もわかっていないのが現状だ。鳥海山の山体崩壊が起きたのが2600年～3000年前。潮瀬崎の現在の地形は、5000年～6000年前から天長地震までの間にできたといわれる。そうした時系列に加え、海をはさんで鳥海山と向き合っている男鹿半島南岸は、大津波が起きれば直撃する位置にあるといえる。これらを考えあわせると、潮瀬崎の巨大岩塊は鳥海山の山体崩壊による大津波で運ばれたとする説が信憑性を帯びてくる。

「秋建時報」の読者の皆さんのなかには、釣りを趣味とする方もいらっしやると思うが、潮瀬崎への釣行の際には、ゴジラ岩だけでなく「過去の津波の証言者」といえる津波石にも是非注目していただきたい。



岩手県田野畑村ハイベ海岸の津波石



男鹿市潮瀬崎の津波石